中大高通信　令和５年５月号

文責：仲森友英（教頭）

４月に第 20 代校長として着任された髙倉樹先生（理工学部数学科教授）のもと、中大高校の新年度が始まりました。入学式から早くも１カ月経ち、「新入生」も「１年生」となってきたように思われます。そのような中大高の様子や学年が考えていることなどを教頭の立場から折に触れてお届けしようと思います。どうぞよろしくお願い致します。

◆◆◆　１年生　◆◆◆

５月のゴールデンウィークを過ぎた新緑の中の中大高です。１年生は、楽しそうではありますが、内心は新しい人間関係構築のために少しずつ疲労の色（例年通りです…）が見える気がします。もちろんそれ以外では、高校での勉強が想像以上にハードであると実感しているからにほかなりません。そうこうしている間に初めての中間考査が始まります。中学校とは異なり、そろそろ試験勉強に手を付けないと追いつかないのです。担任としては頼みますという気持ちを抱く今日この頃です。

さて、クラブへの仮入部期間も終わりなのですが、今年は軽音楽部への希望者が例年以上に多く、顧問は悲鳴をあげています。その一方で、希望者が少ないクラブもあり、その偏り具合が少々大きいことが今年の特徴と思っています。まだ決めていないと思われる生徒もいますので、帰宅部もアリではありますが、本校でも「二兎を追う」こと、勉強も部活も両立させることを求めていますので、これからでもどこかの部活に入ってくれることを学年教員も願っています。

中間考査が明けると、待ちに待った？宿泊行事ホーム・ルーム合宿（いわゆる林間学校）です。卒業生もこの行事は楽しかったと振り返ることが多いのですが、それは生活習慣を身に着ける目的で行われることが多いオリエンテーション合宿（勉強合宿）ではなく、誤解を恐れずに言えば、一切勉強させない合宿だからかと思います。その目的の一つには、個での生活に慣れた子供たちが、集団で少々不自由な生活をし、自然の中で過ごすことによって、少しでも普段の生活に疑問を持ってほしいことがあります。スマホを預かり、ＳＮＳと切り離された時、どう感じるか、少し背伸びして「豊かさとは？」「便利さとは？」ということを考えてほしいのです。そうしたことは「林間学校」でなければ得られない経験であると思っています。ようやく２泊３日に戻ったホーム・ルーム合宿を経ると、不思議なことに顔つきが中学生から高校生に変化します。毎年、この雰囲気の変わり目に立ち会うことは教師としてこの上ない喜びの一つですので、今から楽しみです。

◆◆◆　２年生　◆◆◆

高校での初のクラス替えを経て１カ月が過ぎました。昨年は、優秀とされたクラス、静かなクラス、にぎやか「過ぎる」クラス、捉えどころのないクラスといった形容がなされることがありましたが、シャッフルして個性を平準化し、あらためてクラス作りを促すのが中大高の伝統です。その通りにしたはずなのですが、授業前や休憩時間にちょくちょくのぞきに行っても、すでに個性的な様相を見せ始めています。

さて、２年生とは「その学校の姿を見たいならば２年生を見なさい」といわれる学年です。まさに学校の顔なのですが、それは、１年経って「高校生」に慣れたこと、慣れた時ほどアクシデントが多いこと、そしてそうしたことに上手く対処出来ているかがわかるから学校の状況が見える、ということになります。もちろん、後輩が出来ることや先輩が徐々に引退する中で、自分たちが成長せざるを得ないところに追い込まれるがゆえの「不安」に耐えねばならない試練の学年だからでもあります。

そうした宿命を持つ２年生にとって最初の試金石がホーム・ルーム合宿なのです。合宿では、１年生を導く役目を与えられて、自分たちが率先して行動しなければならないことになっています。自分たちの動き次第で、全体進行が遅くなることを理解し、率先垂範することが求められます。時には上手くいかなくて叱られたりもするのですが、なぜ叱られたのかその説明を受けて、それを理解するよう求めます。そうした小さな挫折経験がこの時期大切であると考えています。まだまだ簡単には上手くいかない文化祭も待ち受けています。その文化祭も少しずつ動き始めていますので、どうぞご期待ください。

また、２年生は自分の進路に真正面から向き合わなければならない学年でもあります。親御さんには共感いただけると存じますが、本当に高校３年間は短い！もう少し進路に対してゆっくりさせてあげたいと思う気持ちもありますが、ある時期の制約された時間の中で、物事を決めなければならない環境に追い込まれることも長い人生の中での貴重な経験と思うのです。それが「高２の秋」ということになりますが、学年陣は「プレ」進路の時期ということで７月 15 日の中大イベント、あるいは夏休みのオープンキャンパスへの参加を義務付けています。少々先のことではありますが、大学という存在を何となくでも感じ取ってもらえればという思いを持っています。

◆◆◆　３年生　◆◆◆

いよいよあと１年。正しくは卒業式まで 10 カ月！もちろん夏休みなどを挟むわけですから、学校に来る時間はもっと短いわけです。もう高校生活カウントダウンに入ったと考えても大げさではありません。

さて、中大高を知っている人にとってよくわかる話として…。４月の始業式当日、３号館の教室に生徒がいる光景を目の当たりにして、とうとうここまで来たのか…という感慨を抱きます。今の３年生もそうでした。同じ顔つきなのに…２年生の教室から離れて 20 日ほどしか経っていないのに、３年生の教室にいるだけで生徒そのものの雰囲気が違います。でも、本当に３号館の教室が持つ場に生徒の雰囲気が合致するには、３年生としての行事を経ること、やはり通過儀礼が必要です。それが修学旅行です。やはり修学旅行を経験して、一皮むけるという気がしています。中四国に近畿も加わるという広域旅行、実り多きものになることを願っています。

ただ、受験を考えている生徒にとってはここからのバランスが結構大変なのです。附属校ゆえ、行事がまだまだ残っており、文化祭、そして応援団（ダンスパフォーマンス）の結成となる体育祭があるからです。そうした行事といかにつきあうか、思い出作りとともに自身の勉強時間の確保が求められます。

９月中旬を過ぎるとようやく本当に何もなくなります。いえいえ、なくなりはしません。大人からみれば集大成となる時期、つまり、全ての行事を経験したからこそ理解できる「普段の」高校生活がそこから始まるのですが…高３にとってみれば、もう進路のこと、勉強しかない、と思ってしまいます。大事にしてほしい時間はここからなのですが…。

いずれにしましても、３年の教員陣は、いかに「楽しさ」と「真面目さ」のバランスをとるのか、その塩梅に腐心しています。ここから来年３月１日までの卒業式までどのようなストーリーを作るのかは担任の見せどころでもあります。学年主任を始めとして皆、卒業して良かったと言ってもらえるよう頑張っておりますので、お力添えの程どうぞよろしくお願い致します。

最後になりましたが、保護者の皆様は、中央大学高校「後援会」の会員でいらっしゃいます。どうぞ本校の教育に対しまして、今後ともご支援を賜りたく存じます。